

Vol.59

Vol.59 (2014年夏号)

PMI 日本支部 ニュースレター



Column / 他国カンファレンス	3
Best Practice and Competence / PM 事例・知識	8
Activities / 支部活動	13
PM Calendar / PM カレンダー	16
Fact Database / データベース	17
Editor's Note / 編集後記	21

Column / 他国カンファレンス	3
• Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告	PMI日本支部 事務局長 田坂 真一
Best Practice and Competence / PM 事例・知識	
◆ PMBOK® ガイド 第5版 日本語版ご紹介セミナー	8
	PMI日本支部 事務局長 田坂 真一
◆ 2014年6月度月例セミナー概要レポート	10
	セミナー記者 鬼束 孝則
Activities / 支部活動	13
• 部会紹介～ソーシャルPM研究会 (その1)	PMI日本支部 理事 (社会貢献担当) ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会 代表 高橋 正憲
PM Calendar / PMカレンダー	16
• PMI日本支部関連セミナー等	
Fact Database / データベース	17
Editor's Note / 編集後記	21

◆ 商標等について

「PMI Project Management Institute」とそのロゴおよび「PMP」、「CAPM」、「PMBOK」、「OPM3」、「Quarter Globe Design」は、米国および他の国で登録されているプロジェクトマネジメント協会のマークであり商標です。プロジェクトマネジメント協会のマークの対象リストについては、プロジェクトマネジメント協会の法務部門へお問い合わせください。

「ITIL® (IT Infrastructure Library)」は、英国及び欧州連合各国における英国政府 Cabinet Officeの商標又は登録商標です。

Column / 他国カンファレンス

■ Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告

PMI日本支部 事務局長 田坂 真一

2011年に始まり、今回で6回目（うち1回はソウル開催）となるグローバル・リーダー香港研修コースが、2014年5月20日(火)～5月24日(金)の日程で開催されました（研修は5月21日～5月23日の3日間）。

■ 会場へ（現地での移動もトレーニングの一貫だったが…）

昨年（2013年）のコースでもそうでしたが、香港の5月は日本の梅雨に当たる時期のようで、到着した20日(火)は気温33℃、湿度97%、土砂降り、皮肉にも研修にはベスト環境（研修中は外は気にしなくて良いという意味で）でした。

当初は空港からMTR（空港快速、地下鉄）に乗車してホテルへ向かうことを予定していましたが、大きな荷物を抱えた一行は、傘が役に立たないほどの豪雨を目にして急きょ予定を変更。九龍駅からホテルまでの士（タクシー）3台に分乗し、日本からの参加者6名と私は九龍半島の中心地、尖沙咀（チム・シャー・チョイ）駅にほど近い会場のホテル「ハイアット・リージェンシー」へひとまず無事に到着しました。翌日からの集中トレーニングに備え、しばしの休息も兼ね近くの中華レストランで夕食を一緒に済ませました。

この中華レストランには予約なしに入店しましたが、時間帯が早かったせいか混んでおらず、安くて美味、大変お得なレストランでした。

本来、機場快速*（エアポート・エクスプレスMTR）で香港空港駅（ランタオ島）⇒香港駅（香港島にある終点）⇒中環駅（セントラル）⇒徒歩にてMTRツェンワン線の中環駅⇒尖沙咀駅（九龍半島）⇒徒歩にてホテル



研修会場 兼 宿泊先のハイアット・リージェンシー尖沙咀（中央の高層ビル）

という計画だったのですが、予定変更により九龍半島の九龍駅でエクスプレスを降りてタクシーでホテルへ向かいました。これによりずぶぬれにならず済みましたが、本来の地下鉄（MTR）の切符購入体験などができずじまいとなりました。

※機場快速：24分で空港と香港駅を結ぶ快速（日本ではNEX「成田エクスプレス」に相当）。停車は5駅のみ：香港空港駅⇄青衣駅（ツインイー）⇄南島駅（ナムツェング）⇄九龍駅（カオルン）⇄香港駅

香港駅まで行かなかったのは、現地のタクシーが交通渋滞に巻き込まれやすい「香港島 ⇄ 九龍」の行き来を極度に嫌がるため、ホテルと同じ九龍側での途中下車を選ぶことにしたものです。

■ コース概要

今回のコースは「トレーニングのタイム・テーブル概要」に従い、「リーダーの立場に立って国際環境でのプロジェクトの立ち上げ、実行を疑似体験する」目的で計画されており、グローバル・プロジェクトに携わるマネジャーやリーダー、リーダー候補が直面するさまざまな問題を、1日目と2日目はそれぞれ5チームに分かれ、ディスカッション、プレゼンテーションを通して考察し、発表するワークショップ形式、3日目はインストラクターをはさんでコの字型に着席し、1（インストラクター）対N（17名の受講者）のブレーン・ストーミングとインタラクティブQ&A（掛け合い）で進める方式でトレーニングを進めました。

2日目のリスクマネジメントを除き、初日と最終日のテーマはこの度初めてとりあげるトレーニングであり、興味深い研修となりました。

インストラクターは、初日がRaymond Wong氏。一昨年末までPMI香港支部会長を務めグローバル・プロジェクト経験が豊富なインストラクターで、現在居住中のカナダのトロントからこの研修に併せて香港に来てくれました。

2日目は日本においてプロジェクトマネジメントに関する

■ Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告

トレーニングのタイム・テーブル概要

Time	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	Venue
20-May	 Flight from Tokyo/Kansai to Hong Kong												
Session Day 1	Breakfast	Effective Business Req./Analysis for Global PJ Leaders (Raymond Wong)									Free dinner	Hong Kong	
21-May	Opening	Case Study 1	Lunch	Case Study 1									
Session Day 2	Breakfast	Project Risk Management (Mark Beresford)									Free dinner	Hong Kong	
22-May	Case Study 2	Lunch	Case Study 3										
Session Day 3	Breakfast	Innovation (Simon Tam)									Free dinner	Hong Kong	
23-May	Case Study 3	Lunch	Case Study 3										
24-May	 Return Flight from Hong Kong to Tokyo/Kansai												

トレーニングやコンサルティングを十数年にわたり務めている経験豊富なMark Beresford氏。やはりこの研修のために香港まではせまじインストラクターを担当。

最終日はSimon Tam氏。長年香港大学にてイノベーションに関する教鞭（きょうべん）をとっていましたが、現在はイノベーションに関するコンサルティング会社を起業し、日本を含めアジア各国でのコンサルティングに日々忙しく活動しています。

■「香港」という環境の必要性

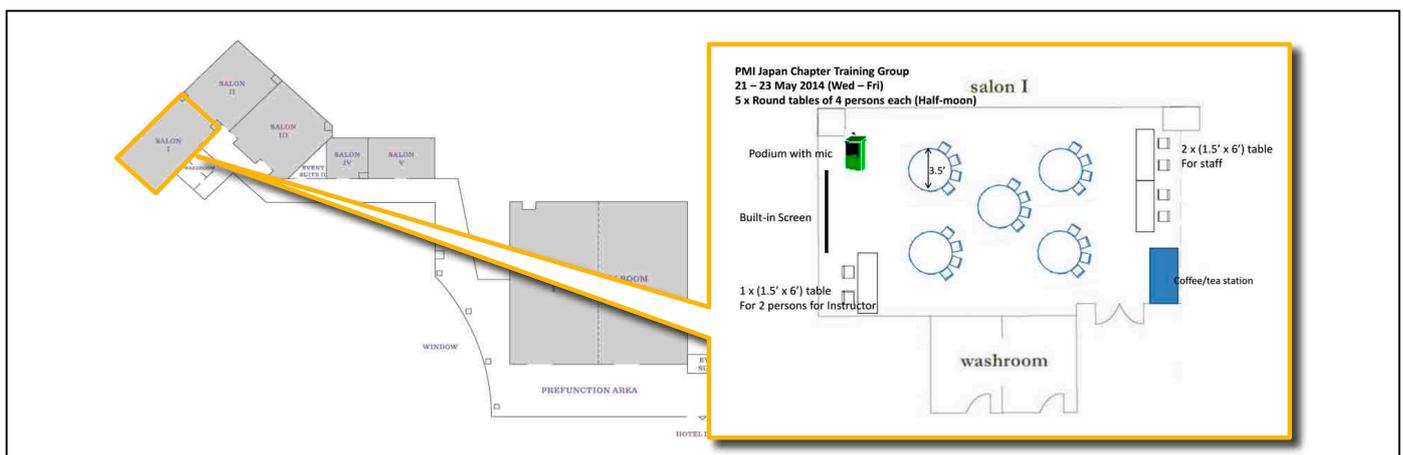
なぜ香港で開催するのか？それは、グローバルでのコミュニケーションの基本となる「英語」が公式な言語の一つだからです。複数の国々のステークホルダーが関わるグローバル環境ではプロジェクトが「日本語」で進められることを期待

するのは一般的に無理です。したがって、トレーニングとして「英語」を使う環境には香港がピッタリということになります。

また、日本で開催する場合、業務都合により呼び戻されて途中離脱せざるを得ない参加者も出て、トレーニングにならないことが散見されますが、香港まで来ての受講ではそのような状況はまず起こりません。なにせ、帰国するにも一日がかりとなるため途中帰国は無理です。まず、トレーニングに集中できます。

また、研修会場はホテル・ロビー階のSalonを使用しましたが、この研修室には窓がなく出口を除き全て壁で囲まれ、外の景色を気にすることもできません。最初に「皮肉にもベスト研修環境」と記載しましたが、それを裏付けています。

研修会場のロケーションとレイアウト



■ Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告

■ 参加者

受講生は18名で過去最大の人数となりました。

日本から6名（うち女性3名）、中国4名（女性2名）、韓国2名、香港2名、台湾3名（うち女性1名）、マカオ1名。

日本の参加者から、「人数が少し多すぎるのでは？」というフィードバックもありましたが、このコースは日本での知名度よりアジア各国での知名度の方が高く、中国からさらに参加の打診をいただきましたが、お断りしたのが実情です。人数が多ければ、一人当たりが意見を出したりチーム代表で発表したりする回数や時間が減るとするのは道理ですが、そこは自身が積極的に対応することでそれらの機会を増やすことは可能です。また、あえてそういう積極性をを見せていただければ良いし、人数が多ければそれだけ異なる意見や考えが効率的に交換できるということを主催者として考えています。

■ 2日目のRisk MgTトレーニングのアジェンダ抜粋

Activity - Common Project Issues
Definitions
Risk Management Process
Project Governance Process
Initial Risk Assessment
Case Study - Mobile Banking
Activity - Risk Assessment
Plan Risk Management
Risk Identification
Qualitative Risk Analysis
Analysis - Urgency of Risk

Quantitative Risk Analysis

Plan Risk Responses

Control Risks

Seminar Review

Personal Action Plan

■ この研修で得ていただけたグローバル・プロジェクトの気付き

○自己主張をしないと相手にされない（ロジカルに分析し、相手を説得する習慣が必要）

真面目、控え目だけでは通用しない ⇨ 寡黙は罪

キーなるステークホルダーは何を欲しているのかよく分析・理解が必要

○英語は言語というよりPMが押さえておくべきコミュニケーション・ツールの一つ

筆談、ジェスチャーも交えて正しく相互理解する努力を行うべし

所詮ネイティブではない 発音、文法など気にするべきではない

○グローバル環境では日本人の常識が通用しない

性善説で行動すると痛い目にあう ⇨ 勝手に期待するのは失敗のもと

「わかってくれているはずだ」は思う方の勝手だが世の中そうはいかない

○約束事はドキュメントに

口約束だけでは危険、エビデンスとして議事録などドキュメントで残し相互で理解



初日のチーム毎検討結果の発表



2日目のチーム課題理解

■ Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告



最終日 質疑応答の掛け合い



集合写真（青ジャケットはSimon氏）

■「トレーニング・コース開催」プロジェクトマネジメントについて

このトレーニング・コースも支部事務局にとっては一つの重要なプロジェクトであり、結果として今回も「立ち上げ、計画、実行・監視、終結プロセス」を経て、無事に終了しました。

しかし、特徴として国をまたがった香港支部とのコラボレーション・プロジェクト[疑似グローバル・プロジェクト]であり、①どのようなクラス・サイズで ②誰をインストラクターに据え ③トレーニング・テーマは何に ④受講者の参加はどの国から、何人くらい ⑤開催日は ⑥開催会場は ⑦備品は など一つ一つ押さえて開催までこぎつけ、実際に運営し終結させなければなりません。

昨年10月末には、素案は日本サイドではできていましたが、実際、香港との調整が進んでいないため募集を発表できるレベルまで積み上がったものは何もありませんでした。香港支部とのメールによる調整も返答無しなど計画完成など進捗に問題が続く、よく言われるように時間だけが過ぎ、2013年末になっても遅々として進みませんでした。

いろいろ調べた結果、香港支部の会長は、本業（支部の会長職はボランティア）でカナダへの長期出張中のためレスポンス環境が極端に悪いことが分かり、直接会ってその場で決めるしか解決策が無いと考え、香港支部のスタッフ（アルバイト）と調整しながら会長に会う機会を模索していました。

その結果、2014年1月の「とある日」に香港に一度戻ってその後またアメリカに長期出張する予定であることが判明。そこでなんとか、会長が香港に戻る日程を押さえ、そのどこ

かで直接会う約束を取り付けてまさしく急ぎょ1月に渡航。今回のトレーニング・コースの全容が公表できる程度に確定できたのは、まさにこのタイミングで直接調整できた結果でした。会長と日曜日を使って半日すり合わせをし、香港支部サイドのPM（初日インストラクターのRaymond氏）が選出された後は、そのPMと全ての調整を進めていくことができました。このタイミングを逃すと、このコースは未実現のまま終わったことでしょう。当コース開催もいわゆるプロジェクトマネジメントの適用例の一つであると前述しましたが、共催開催までの苦労は相当なものでした。

実際にはさらに、その後も2日目のインストラクター選定でどんでん返しがあったり、会場のホテル側との連日にわたる折衝の中で募集途中のためわかりもしない参加者人数の早期確定（これはリスク・テークをしました）が必要となったり、預託金などの支払いを迫られたりと、会場のホテルとも相当数のやり取りを経ました。

プロジェクトマネージャーである私は、このコースのため相当なワークロードを取られただけでなく、開催するのか集客によっては開催中止とするのか、判断タイミングをいつにするのか、海外の受講者をどう集めるのかなど種々の悩ましい制約条件をクリアしていかなければならないなど苦労の連続でした。

結果として、アジア諸国からの参加者が想定以上に増えるなどうれしい悲鳴もありましたが、それは結果であって、実際にはプロジェクト途中でそのようなことを見据え確信を持つことはなかなかできません。コース発表から開催直前までの募集期間の間は、一つ一つの積み上げなのです。全て終わっ

■ Global Leader Training in Hong Kong 2014 報告

た「結果論」として言えば「良いコースだった」と考えられますが。

これだけの負荷や制約条件の厳しい、疑似グローバル・プロジェクトをまたトライできるのか（気力、知力、体力があるか）。次回（来年？）開催がどうなるかは分かりません。ただ、決めるまでに十分な時間があるようなのでじっくり考えてみたいと思います。

■ 予定外のイベントへの参加

PMI香港支部では、AGM（アニュアル・ジェネラル・ミーティング：支部の状況説明とゲスト・スピーカーによる講演）を5月22日の19:00から開催することになっていたとのことで、トレーニングに参加した受講生も突然招待されることになりました。

スピーカーはシドニーのオペラハウスやパリのポンピドー・センターなど著名な建築プロジェクトのデザイン・コンペに勝ち残った香港人Doctorで参加した受講者にはかなり価値の高い想定外イベントだった。トレーニングの目的の一つに個人のチャンネルを増やし、強化することがありますが、香港支部の会員や支部理事の面々と名刺交換したり立ち話をしたりで、皆さんにとっても大きな収穫となりました。これで追加の1PDUも獲得でき、PMP®資格者にとって柵からぼた餅だったに違いありません。

本来のトレーニング・コースの往復で体験いただく予定だった、「MTRの切符を自分で購入し、満員のMTRに乗って会場に駆けつける」ということも、結果的に実現できました。

Best Practice and Competence / PM 事例・知識

■ PMBOK® ガイド 第5版 日本語版ご紹介セミナー

PMI日本支部 事務局長 田坂 真一

2013年12月初旬から皆さま方から予約注文をいただいていたPMBOK®ガイド 第5版日本語版。日本支部事務局としても一日千秋の思いで到着を待ちうけていましたが、2014年2月に遂に入手。2014年2月14日(「平成26年豪雪」と命名された最悪の天候の日となりましたが)に発送開始させていただくことができました。2014年5月末までに約3,300冊をお届けしています。

さて、第4版から第5版へ改訂された内容について、5月26日の東京会場を皮切りに、6月13日までに名古屋、大阪、富山、福岡、岡山、高松、札幌の全国8ヶ所でご紹介セミナー(PMI日本支部会員、法人スポンサー社員は無料)を実施しました。

ご紹介セミナーの講師は、本年度より日本支部理事に就任され、第5版日本語版翻訳監修の中心的メンバーであった中嶋秀隆理事が担当し、以下に記載したアジェンダにもとづき、各2時間で第5版での主要な変更点やPMBOK®ガイドの底に流れる思想、PMとしての気持ちの持ち方など多岐にわたり紹介されました。

セミナーのアジェンダ

Part 1. PMBOK®ガイドの進化

1. PMBOK®ガイド：第4版から第5版へ
2. PMBOK®ガイドの底に流れる思想
3. PMBOK®ガイドの翻訳という挑戦

Part 2. 成長を続けるPMのために まとめ

参加者からは、「元気をもらった」など、思いもよらない嬉しいコメントいただき、活発な質疑・意見交換などもあり、大きなバリューをお届けできたと感じています。

また、日本支部運営側の立場としては、東京や大阪を除き日頃訪問することが出来ない地域を中嶋理事と事務局長が訪問することで、参加者の皆さまと直接お話ができた貴重な機会でもありました。



東京会場

【ステークホルダー・マネジメント プロジェクトでしばしば起こり得る、戻り切れトンボ、ツルの一声辺りの説明】



富山会場

(講師の中嶋理事による真剣な説明)

◆ PMBOK®ガイド 第5版日本語版出版への道のり

2013年1月に英語版のPMBOK®ガイド 第5版がPMIのWEB上で会員に公開され、2月から書籍として購入いただけるようになっていましたが、この時点では日本語版を含む各国語版対応(10ヶ国語)はありませんでした。

2013年3月より日本支部でも他国と同様、各国語版翻訳

■PMBOK®ガイド 第5版 日本語版ご紹介セミナー

監修プロジェクトが開始され、約10名強の選抜メンバーによって翻訳と監修が開始されました。

この翻訳・監修プロジェクトは、PMIでは別名TVC (Translation Verification Committee) 5 Japanプロジェクトと呼ばれ、平たく言えば、PMBOK®ガイド 第5版の各国語版出版準備委員会で、正式な「PMBOK®ガイド 日本語版」を作成するものです。

プロジェクト・メンバーの方々は、鈴木安而プロジェクト・マネジャーのもと、主として土曜日あるいは日曜・祝日を使って、米国で行っている一次翻訳の全章やグロスラリー全体をレビューし、日本語としての標準書にふさわしい翻訳・監修を行っていきました。今回は、米国から変更管理のツールなどの提供も受け、それを利用しつつの作業でしたが、操作性やレスポンスが極度に悪くなって苦労したほか、章全体の翻訳・監修状況が見られないなど種々の改善点を残しながらの作業で、12月後半に最終承認版を米国に提出することができました。

プロジェクト・チーム・メンバーには大阪からの参加もあり、インターネットを通しての無料コミュニケーション・ツ

ルなども利用するというプロジェクト運営でした。PMBOK®ガイド 単体だけでなく、PMIから出ているプログラムマネジメント標準、ポートフォリオマネジメント標準、組織的プロジェクトマネジメントなどとの整合性を確保するなど厳しい制約の下で進めて行かざるを得ないプロジェクトでしたが、教訓もまとめられ次回第6版の翻訳・監修プロジェクトに引き継げる状態とし、TVC5プロジェクトは終結しました。



2013年3月 TVC5Japanプロジェクトでの翻訳・監修作業状況
〔PMI日本支部にて〕

セミナーレポート

■ 2014年6月度月例セミナー概要レポート

セミナー記者 鬼束 孝則

【セミナー概要】

- 開催期日：2014年6月6日(金) 19:00～21:00
- タイトル：PMのためのプレゼンテーションの極意
- 講師：日本大学芸術学部教授
博士（パフォーマンス学専攻）
佐藤綾子氏
- 講師のプロフィール：
 - ・国際パフォーマンス研究所代表
 - ・一般社団法人パフォーマンス教育協会（国際パフォーマンス学会）理事長
 - ・「佐藤綾子のパフォーマンス学講座®」主宰
 - ・内閣府認可一般社団法人パフォーマンス教育協会認定パフォーマンスインストラクター資格発行者
 - ・「佐藤綾子のパフォーマンス学講座®」公認ピア・パフォーマンスカウンセラー資格発行者
 - ・最新図書：『安倍晋三プレゼンテーション 進化・成功の極意』（学研教育出版）

【講演の様子】



【講演の狙い】

プロジェクト・マネジャー（PM）の業務の90%がコミュニケーションと言われているように、日々、PMをしていると、さまざまなステークホルダーと会話をする機会があります。また、PMBOK®第5版が昨年12月に公開され、「ステークホルダー・マネジメント」が、10個目の知識エリアとして新設されたことから、PMにとってステークホルダー・マネジメントはこれまで以上に重要視されています。ステークホルダーとのコミュニケーションにはさまざまな方法がありますが、大勢に意思を伝える際の最も効果的な方法として、プレゼンテーション形式が採用されることが多いと思います。しかしながら、日々、現場でのプロジェクト管理業務に手一杯なPMは、なかなかプレゼンテーション技法を学ぶ機会がないというも実情です。世界に感動を伝えた、東京オリンピック招致のプレゼンテーションを見て、「あんな風に自分も人に伝えることができればいいのになあ」、と思った方も多いと思いますが、今回のセミナーでは、パフォーマンス学の第一人者である佐藤綾子氏により、明日からでもすぐにも使えるプレゼン技法を惜しみなくご指南いただき、その極意を身に付けてもらうことを狙いとしました。

【講演内容】

講演は参加されているプロジェクト・マネジャーの方々が

■ 2014年6月度月例セミナー概要レポート

普段の仕事の中でプレゼンテーションする際に経験したことがあるであろう失敗例をセルフチェックすることからスタートしました。以下8つのシチュエーションに対し各自が振り返るというものです。

- ①事前の相手ニーズの把握不足により、お客さまが要望している製品やサービス内容と乖離があり、出直しになった。
- ②プレゼンでキレ味の悪い言葉を多く使って、提案そのものに不安を抱かせる結果となり、不採用となった。
- ③他の人が作成したプレゼン資料をよく読み込まず本番プレゼンに挑み、質問に回答できないどころか、書いてあることの意味を説明できず出直しとなった。
- ④地位の高い人に細かな説明をしてしまい、伝えたいことの全体イメージをつかんでもらえず、主張が理解されずに不採用となった。
- ⑤おわび等のプレゼンで、細かな部分についての知識不足にもかかわらず、無理に自分だけで答えようとして、しどろもどろになった。
- ⑥プレゼンチャートを作成者視点で構成・表現したが、相手の気分を害したらしく否決された。
- ⑦たくさんのポイントを入れこんだが、時間切れで肝心な部分を説明できなかった。
- ⑧自分ではプレゼンの全体シナリオを考えていたが、冒頭で相手に意表をつかれる質問をされてペースが乱れ、ボロボロの説明となった。

こうした失敗をしない「強いプレゼン」を展開するためにPMが行うべきロジカル・プレゼンというものを最初に講義いただきました。そこから、そのプレゼンには「やるだけの論理的な価値があるのか？」という展開となり、論理の基本的価値にはA：発見があるか？ B：批判があるか？ C：統合があるか？という流れで、プレゼンの構造としては「LFP理論」を押さえておくことを学びました。LEPのLはロゴス【論理性】話の内容・エビデンス、Eはエトス【信ぴょう性】話し手の信用、Pはパトス【感情】聞き手への感情へのアピールを表すとのことでした。またロジカル・プレゼンには①最初のあいさつ、②POS（ポイント・オブ・サゼスチョン）、③相手のメリット、④支持材料の明示、⑤少しの個人的体験の自己開示、⑥POSの繰り返し、⑦最後のあいさつ といった7つの流れがあることを講義いただきました。

POSを絞り込むというセクションでは、各場面での注意点として以下のことを挙げ、その説明の中には現在の安倍内閣

の施策である三本の矢といったものもたとえて紹介いただくなど、とてもわかり易い説明でした。

- 事前のヒアリングで相手のニーズをつかむ
- 事前のヒアリングで相手のキーパーソンの**性格、欲求、社会的傾向**をつかむ
- 相手のニーズと集団の性格は千差万別であり、しかも、**社会経済的時期**によっても変わる
- POSの内容項目は、できるかぎり少なく絞る
時間切れと焦点ボケを防ぐために**最大3点に絞る**

この中で佐藤氏は、どのような方々が聴講し何を求めているかなど、まず相手を知ることが肝要であると説かれました。彼らが求めるものに対し、自分自身のプレゼンがマッチするようにカスタマイズし、事前に自ら出向いてヒアリングまで行っているという点は参加者全員が驚かされる内容でした。プレゼンのプロである佐藤氏がここまで実践されているということを知り、筆者自身ができていないことをとても恥ずかしく感じた瞬間でもありました。事前ヒアリングの大切さをあらためて痛感させられました。

また、事前に相手のこと（著書や趣味など）を調べておき、プレゼンの冒頭でそれについてサラッと話題にし、その相手との距離感を縮めるためのブリッジングが大切なこと、加えてプレゼンのテクニクとして1分間あたり32秒間のアイコンタクトが必要なこと、プレゼン資料など「物」に頼らないことなども教えていただきました。そしてプレゼンには高い理念の明示が必要で、そのプレゼン者および相手がリーダーである場合には、そのプレゼンにおける高い理念の明示が必要で、その流れとしては「理念」→「戦略」→「計画」の形で迫ることが大切であると説明いただきました。

何度も繰り返し佐藤氏が言われたこと、それは毎日がプレゼンであり、毎日のプレゼンがリハーサル効果になることでした。そして、練習、練習、……、最低でも20回は練習して台本・資料も見ずに説明できるようにし、最後に鏡を見ながらの練習で自分の表情・身ぶりを確認すること、そしてその先に初めてアイコンタクトをする時間が生まれるということでした。

講演項目としては以下の内容でしたが、東京オリンピック招致活動のプレゼンや安倍晋三首相のプレゼンを織り交ぜながらの説明にはとても説得力があり、また、わかり易く、今

■ 2014年6月度月例セミナー概要レポート

後プレゼンに対しどのように取り組んでいくべきかをしっかり考えさせていただく大変良い機会となりました。

1. ロジカル・プレゼンの構造
2. 成功するプレゼンの基本手順
「ただし、人は理屈だけでは動かない」
3. NVC（非言語的表現）の重要性
4. 安倍プレゼンのコーディングデータ
5. 安倍プレゼンの変化
6. ワークショップ

【企画者の感想】

最初に佐藤綾子氏と面識を持ったのは昨年11月に開催されたPMI Japan Festa 2013での講演をお願いした時でした。その本番前に2013年9月の法人スポンサー連絡会でセミナー委員会代表として私が講演する機会があり、その会場に佐藤氏は顔を出されました。その時点で私自身、なぜ佐藤氏がそこにわざわざ顔を出されたのか理解できていませんでしたが、今回の講演を通じて、プレゼン前には事前にヒアリングする

ということの説明を聞いた途端、佐藤氏が取られてきた一連の行動の真意がわかり、それと同時に自分自身のプレゼンに対する取組姿勢を猛烈に反省させられました。また資料を作り、頭に全て収めることは当たり前で、そこから初めてプレゼンが始まるということや、資料を見ずに会場の参加者一人一人に対してアイコンタクトを送る姿勢には圧倒的なプロ意識を感じさせられました。佐藤氏のようなプロでも、講演を迎える前は胃が痛くなる思いだそうです。事前のヒアリングや繰り返し行う練習によってプレゼンそのものの精度を上げていくというやり方は聴講者の心をつかんだのではないかと思います。

聴講者全員が食い入るように佐藤氏の講義に耳を傾けていらっしゃる様子から、聴講者にとって極めて価値のある講演であったことを確信しました。

今回のご講演にあたり、多忙な中、ヒアリングから当日の講演に至るまで緻密に準備いただいた佐藤綾子さまと会社のスタッフの方々に対し感謝の気持ちでいっぱいです。これからも良いつながりを持続していきたいと思えます。

Activities / 支部活動

■ 部会紹介～ソーシャルPM研究会（その1）

PMI日本支部 理事（社会貢献担当）

ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会 代表 高橋 正憲

■ はじめに

東日本大震災から3年、PMI日本支部では「災害復興支援プログラム」を立ち上げ、プロジェクトマネジメントの専門性を活かしたプロフェッショナルなボランティアとして復興支援活動を行ってきました。その中でいくつかの復興プロジェクトには直接参加してマネジメントの支援を行いました。活動主体やテーマが異なるプロジェクトを意図的に選び、パイロット・プロジェクトとして行ったものですが、成果を十分に挙げられたものもあり、そうでないケースもありました。

そこで得られた教訓は復興支援に限らず、社会課題を解決する活動（これを、「ソーシャル・プロジェクト」と呼ぶ）に共通して活かせるものであり、「新しいPM手法」の開発が望まれていると考え、「ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会」を創設しました。

ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会発足に至った経緯については、2013年11月にPMI日本支部のホームページ上で既に紹介済ですので、ご参照ください。

【特別寄稿】PMI日本支部の災害復興支援プログラム

<https://www.pmi-japan.org/topics/cat613/socialpm.php>

ここでは、その後の検討結果に基づいて、ソーシャル・プロジェクトマネジメント（ソーシャルPM）の基本的な考え方と研究会組織の概要について解説し、次回以降に各WG（ワーキンググループ）の具体的な活動とその成果を説明します。

◆ ソーシャルPMのアプローチ

復興支援パイロット・プロジェクトの教訓から、ソーシャル・プロジェクトには以下のような困難があることがわかりました。

- ◆ 多様なニーズがあって、焦点を絞れず議論が堂々巡りして前に進まない。

- ◆ 目標やスコープがあいまいで、実行計画がまとまらず、走り出せない。
- ◆ 思いのままに進められるが、成果を出せない。
- ◆ 制度的な規制が障害となって、計画変更を余儀なくされる。
- ◆ マネジメント体制が弱く進捗が把握できない。

既存の手法をそのまま適用しても、なかなか定着しません。小規模なプロジェクトであればリーダーが頭の中で進めていけばよいですが、ときには方向がずれて協力体制が得られないこともあります。規模が大きくなると、価値観の異なるいろいろなステークホルダーが絡んできて合意形成がうまくいかなくなります。

このような状況では、必ずしもトップダウンではコントロールできません。通常の企業であればミッション、ビジョンから展開して戦略計画を策定するところですが、ソーシャル活動を進めようという組織ではミッション、ビジョンどころか、集まった人々の思いもさまざまであることが多いのです。そこでソーシャルPMでは、トップダウンのアプローチではなく、現場の問題に即した取り組みをすることが必要になります。

現場の体験から現場を理解し、問題を把握する、現場に入って一緒に考えるアプローチをとらなければなりません。多様なステークホルダーの価値観、ニーズをくみ取ってゴールを共有し、解決策を探りながら、ときには試行錯誤を繰り返すこともあります。

ケースバイケースでアプローチも異なりますので、簡便かつ臨機応変に使える手法とツールを開発し、いろいろな参照事例を提供することにしました。

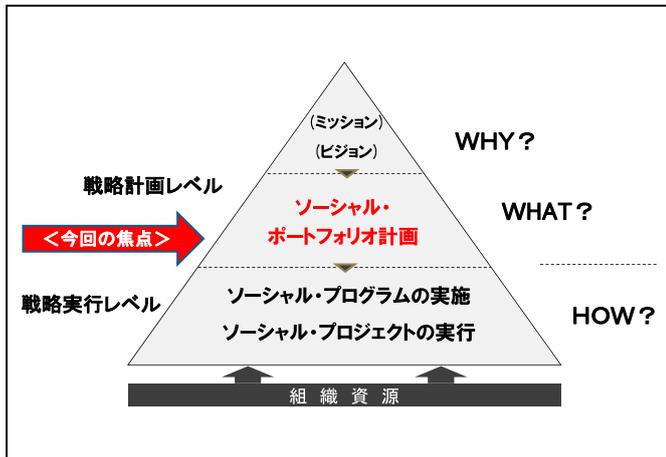
■ ソーシャルPMフレームワーク

上述のアプローチを具体化するために、まず全体的な枠組みを検討しました。一般企業とは違い、ソーシャル活動組織ではミッションやビジョンが必ずしも明確にされていません

■部会紹介～ソーシャルPM研究会（その1）

ので、現場の問題把握から戦略計画へと進める手法を新たに構築する必要があります。それを「ソーシャルポートフォリオ計画」と呼ぶことにします（図1参照）。

図1 ソーシャルPMフレームワーク



■ソーシャル・ポートフォリオ計画

ソーシャル・ポートフォリオ計画では、現場の理解から始めて問題解決策を実行するまでのアプローチを具体化するために、ソーシャルデザインの方法論を参照しました。全体のフレームについては、Kumar (2013) のデザインメソッドを参考に、上述のソーシャルPMアプローチを形成する5つのフェーズ（企画、調査・分析、統合、実現、評価）を設定し、今回の目的に有効な手法を選定しました（図2参照）。

参考文献中の手法は一般化されているので、今後の研究の中で個々の手法をソーシャルPMアプローチに即した形に改めていきます。その中で、特に中核的なステップになる調査・分析フェーズについては、小田博志 (2010) のエスノグラ

フィーの手法を応用します。個々の手法の解説は次回以降に詳述しますが、一連のプロセスの中でポイントになるのは、「フィールドワーク」による現場での問題発見、「プロトタイプング」による試行錯誤、「ポートフォリオ」による代替案の評価と資源配分の最適化です。

■ソーシャルPM研究会の概要

上述のソーシャルPMのコンセプトを実現するために、ソーシャルPM研究会を組織しました。研究会のミッション／ビジョンを図3に示します。

図3 ソーシャルPM研究会のミッション／ビジョン

◆ミッション

「社会課題の解決を目的とする活動」（ソーシャル・プロジェクトと呼ぶ）に適するプロジェクトマネジメント手法（ソーシャルPM手法と呼ぶ）を開発し、普及することによって社会の発展に貢献する。

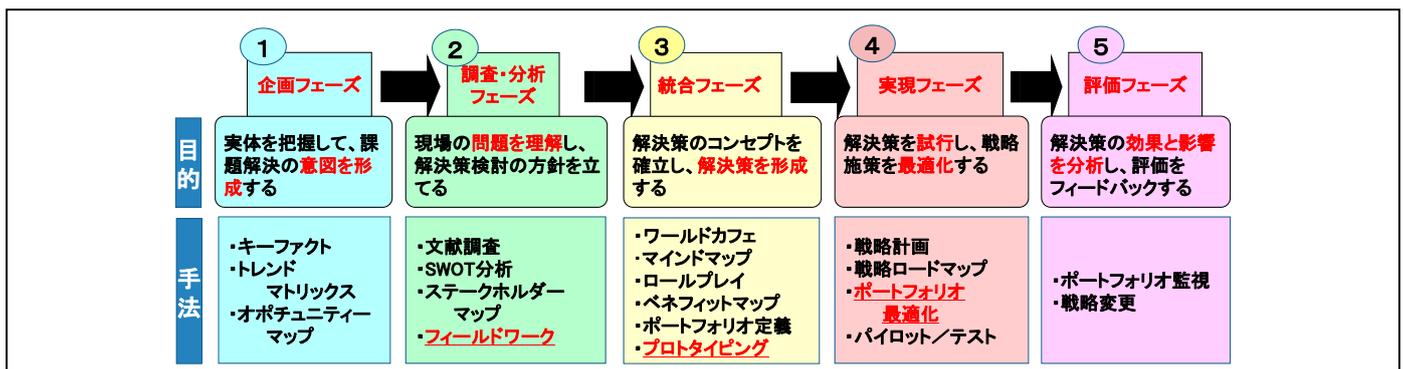
◆ビジョン

ソーシャル・プロジェクトの実行組織（自治体、企業、NPO等）と協働して、段階的に以下の状況を目指す。

- ① ソーシャル・プロジェクトの実態を調査し、ニーズと要求事項を把握する
- ② ニーズの変化にも対応可能な、ソーシャルPM手法を体系的に開発する
- ③ 社会全般にソーシャルPM手法を発信し、実活用が可能な状態にする

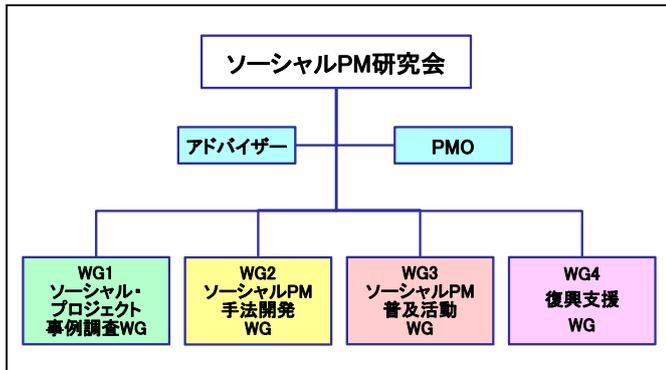
図4にソーシャルPM研究会の実行体制を示します。上記のビジョン①～③に対応してWG1～WG3を組織し、これまで復興支援パイロット・プロジェクトとして行ってきた活動をWG4として継承します。

図2 ソーシャル・ポートフォリオ計画



■部会紹介～ソーシャルPM研究会（その1）

図4 ソーシャルPM研究会の体制



研究会の運営はプログラムマネジメント標準に則って行います。PMOは研究会全体のプログラム・ガバナンスを担当します。各WGの下で現在実行中または企画中のプロジェクトを図5に示します。

■おわりに

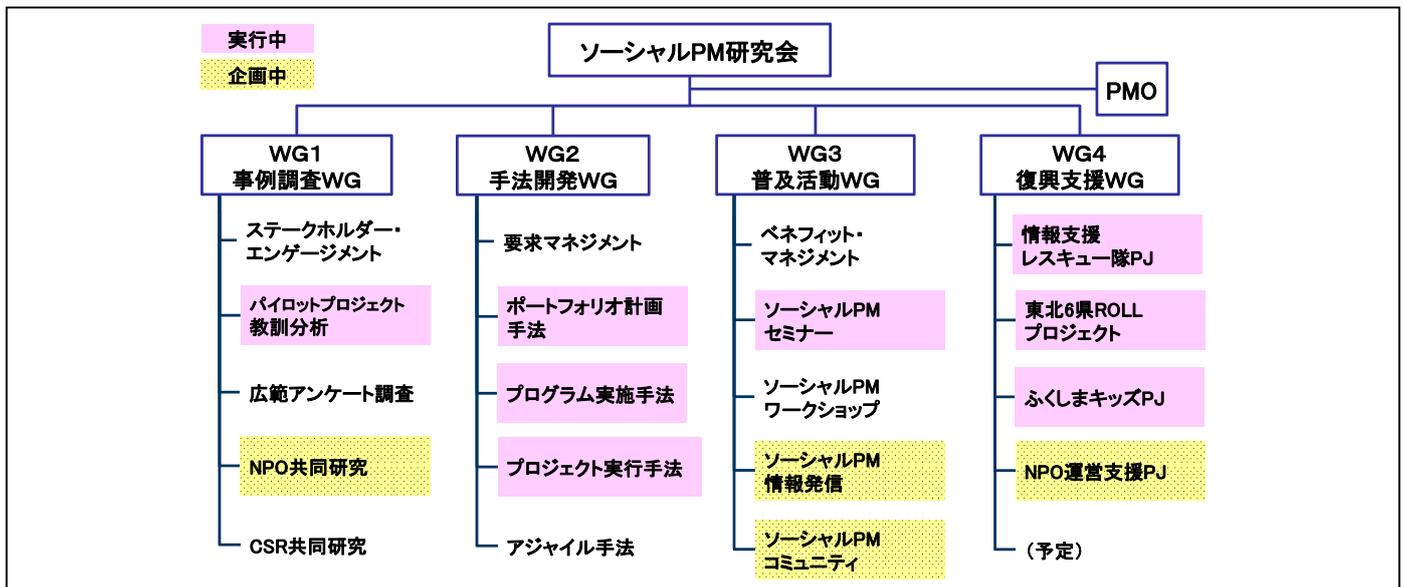
この研究会そのものがまさにソーシャル・プロジェクトであり、成果物としてのソーシャルPM手法は、今後プロトタイプを公開し、NPOや企業CSRのプロジェクトにおいて試行して評価のフィードバックを受けて改良していきます。

また、今回は戦略計画レベルを中心に解説しましたが、実行レベルではPMIが持つプログラムマネジメント、プロジェクトマネジメントの手法をソーシャルPMに適合させて開発していきます。

この活動に関心を持つ方の参加を歓迎します。図5のプロジェクトの一つでも興味がありましたら、以下のサイトをご覧ください。

ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会 参加者募集
https://www.pmi-japan.org/session/study_club/social_pm.php

図5 実行中および企画中のプロジェクト



参考文献

Kumar, Vijay (2013), 101 Design Methods: A Structured Approach for Driving Innovation in Your Organization, Wiley.
 小田博志 (2010)『エスノグラフィー入門〈現場〉を質的研究する』春秋社.

PM Calendar / PM カレンダー

PMI日本支部のイベントならびにPM教育関連セミナーなどの案内です。
詳しくは、PMI日本支部のWebサイトをご参照ください。

■ PMI日本支部関連セミナー

- **プロジェクトマネジメント教育セミナー**
～PMI日本支部教育委員会設立10周年記念イベント～
 - 日時：7月4日(金) 19:00～21:00
 - 場所：札幌エルプラザ 研修室
 - 参加費無料 (PDU発行なし)
- **アジャイル プロジェクト マネジメント の基礎**
 - 日時：8月6日(水) 9:30～18:00
 - 場所：PMI日本支部セミナールーム
 - 最大7PDU
- **ファシリテーション基礎**
明日から使える！ 現場で役立つ！
 - 日時：2014年9月12日(金)
 - 場所：PMI日本支部 セミナールーム
 - 7PDU
- **アジャイル プロジェクト スタートアップ入門**
 - 日時：9月2日(火) 9:30～18:00
 - 場所：PMI日本支部セミナールーム
 - 最大7PDU

■ PMI日本支部関連イベント

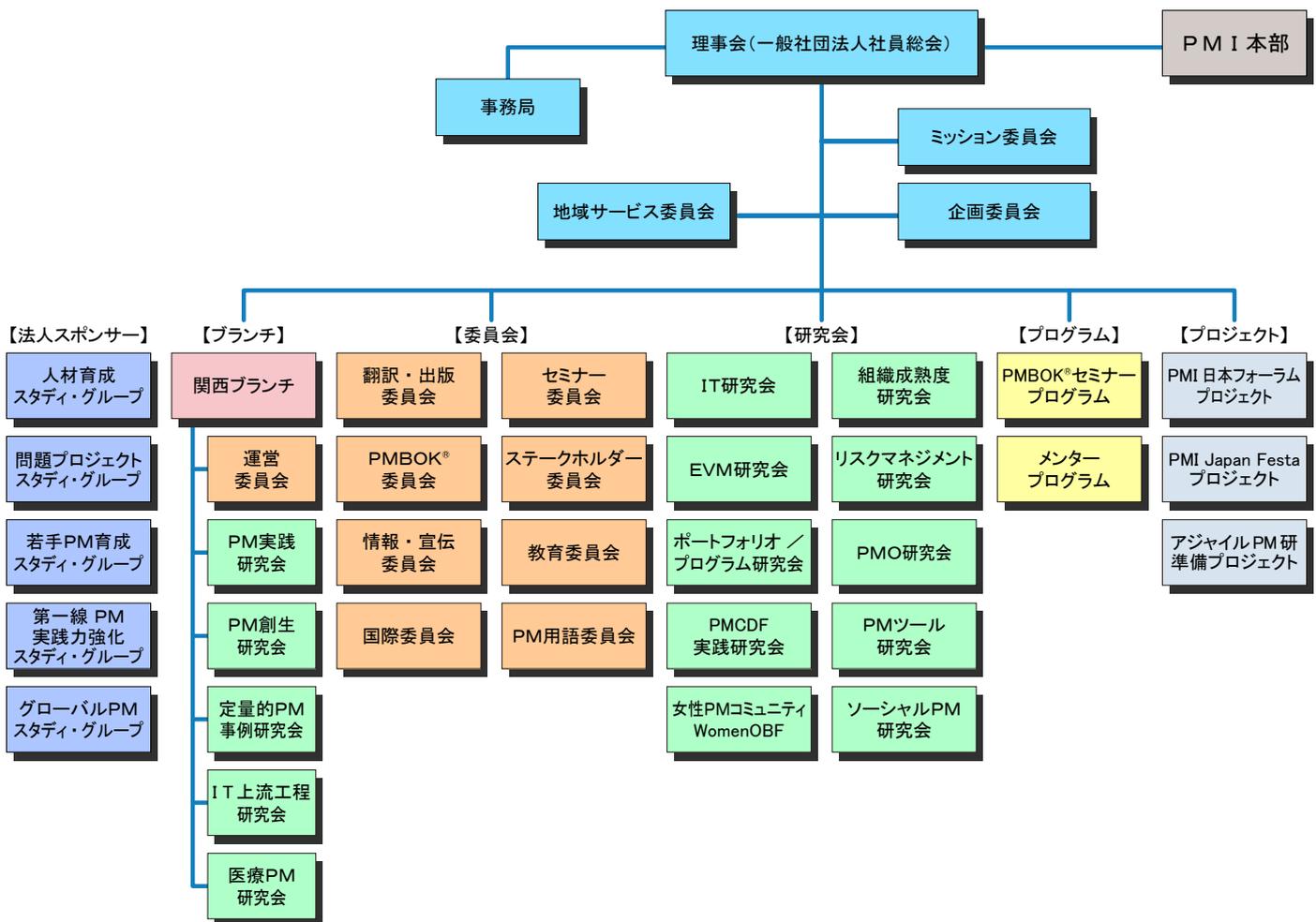
- **2014年度 PMI日本フォーラム2014**
 - 日時：2014年7月12日(土)・13日(日)
 - 場所：学術総合センター (東京・神保町)
 - 最大12PDU
- **2014年度 PMI日本フォーラム2014**
〈大阪リモート会場〉
 - 日時：2014年7月12日(土)・13日(日)
 - 場所：梅田センタービル (大阪市北区)
 - 最大12PDU
- **PMI Japan Festa 2014**
 - 日時：2014年11月8日(土)・9日(日)
 - 場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 協生館
藤原洋記念ホール
 - 最大9PDU

*なお、イベント、セミナー、コースなどは、諸般の事情により変更または中止される場合があります。
PMI日本支部ホームページで確認をお願いいたします。(https://www.pmi-japan.org/event/)

Fact Database / データベース

PMI日本支部やPMP®資格取得者に関する最新情報をお届けします。

■ 支部活動 (2014年6月現在)



■ 理事一覧 (2014年6月現在)

会長	: 奥 澤 薫 (日本電気株式会社)
副会長	: 片 江 有 利 (株式会社プロシード)
理事 (ミッション担当)	: 端 山 毅 (株式会社NTTデータ)
理事 (マーケティング・会員担当)	: 徳 永 幹 彦 (株式会社日立インフォメーションアカデミー)
理事 (マーケティング・会員担当)	: 武 上 弥 尋 (アイエス情報システム株式会社)
理事 (研究担当)	: 当 麻 哲 哉 (慶應義塾大学大学院)
理事 (教育担当)	: 本 間 利 久 (北海道大学)
理事 (教育担当)	: 中 嶋 秀 隆 (プラネット株式会社)

理事 (渉外担当)	: 杉村 宗泰 (日本マイクロソフト株式会社)
理事 (社会貢献担当)	: 高橋 正憲 (PMプロ有限会社)
理事 (社会貢献担当)	: 麻生 重樹 (日本電気株式会社)
理事 (広報・宣伝担当)	: 竹内 正興 (一般財団法人国際開発センター)
理事 (財政担当)	: 三嶋 良武 (株式会社三菱総合研究所)
理事 (地域担当)	: 神庭 弘年 (神庭PM研究所)
理事 (地域担当)	: 木下 雅裕 (ニッセイ情報テクノロジー株式会社)
理事 (コンピテンシー担当)	: 福本 伸昭 (日本アイ・ビー・エム株式会社)
理事 (コンピテンシー担当)	: 除村 健俊 (株式会社リコー)
監事	: 大久保 賢吉朗
監事	: 渡辺 善子

■最新の会員・資格者情報 (2014年4月末現在)

会員数		資格保有者数						
		PMP®		PMI-SP®	PMI-RMP®	PgMP®	PMI-ACP®	CAPM®
PMI本部	日本支部	世界全体	日本在住	日本在住	日本在住	日本在住	日本在住	日本在住
451,871人	3,147人	615,443人	31,803人	4人	4人	3人	8人	56人

■法人スポンサー 一覧 (96社、順不同、2014年6月現在)

- TIS株式会社
- 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 株式会社NSD
- 株式会社プロシード
- 株式会社インテック
- キヤノンITソリューションズ株式会社
- NTTコムウェア株式会社
- 日本電気株式会社
- 株式会社ジェーエムエーシステムズ
- アイアンドエルソフトウェア株式会社
- 株式会社NTTデータ
- 日本マイクロソフト株式会社
- プラネット株式会社
- 株式会社建設技術研究所
- 日本ユニカシステムズ株式会社
- 株式会社クレスコ
- ラーニング・ツリー・インターナショナル株式会社
- 日本ヒューレット・パッカード株式会社
- 株式会社アイ・ティー・ワン
- コンピューターサイエンス株式会社
- 株式会社タリアセンコンサルティング
- TDCソフトエンジニアリング株式会社
- 株式会社大塚商会
- 日本プロセス株式会社
- 株式会社NTTデータ関西
- 日本ユニシス株式会社
- Kepner-Tregoe Japan, LLC.
- JBCC株式会社
- 株式会社富士ゼロックス総合教育研究所
- 日本アイ・ビー・エム・ビズインテック株式会社
- 株式会社アイテック
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・フロンティア
- 株式会社日立インフォメーションアカデミー
- 情報技術開発株式会社
- 富士ゼロックス株式会社
- アイシンク株式会社

- 千代田システムテクノロジーズ株式会社
- 三菱総研DCS株式会社
- ソニー株式会社
- 東芝テック株式会社
- 三菱スペース・ソフトウェア株式会社
- 株式会社三菱総合研究所
- NTTデータアイ株式会社
- 新日鉄住金ソリューションズ株式会社
- 株式会社日立ソリューションズ
- 日本自動化開発株式会社
- 日揮株式会社
- 株式会社野村総合研究所
- 株式会社アイ・ティ・イノベーション
- NECネクサソリューションズ株式会社
- 株式会社三技協
- 株式会社JSOL
- NECネッツエスアイ株式会社
- リコーITソリューションズ株式会社
- ニッセイ情報テクノロジー株式会社
- 株式会社RINET
- 株式会社リコー
- 株式会社システム情報
- ソニーグローバルソリューションズ株式会社
- 住友電工情報システム株式会社
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・ユニバーシティ
- 株式会社マネジメントソリューションズ
- トップランダムアンドアイ株式会社
- PMアソシエイツ株式会社
- 株式会社日立製作所
- 株式会社システムインテグレータ
- 日本ビジネスシステムズ株式会社
- コベルコシステム株式会社
- 日本電子計算株式会社
- 富士電機株式会社
- 株式会社日立システムズ
- 株式会社神戸製鋼所
- 日本証券テクノロジー株式会社
- 株式会社リクルートテクノロジーズ
- クオリカ株式会社
- 株式会社エクサ
- International Institute for learning - Japan 株式会社
- 株式会社ラック
- ニューソン株式会社
- 三菱電機株式会社
- TAC株式会社
- 日本情報通信株式会社
- 日立INSソフトウェア株式会社
- 株式会社シグマクシス
- アーケイディア・コンサルティング株式会社
- 株式会社TRADECREATE
- 株式会社日本ウィルテックソリューション
- システムスクエア株式会社
- 株式会社アイ・ラーニング
- 株式会社トヨタコミュニケーションシステム
- 東芝インフォメーションシステムズ株式会社
- 株式会社パソナ パソナキャリアカンパニー
- 株式会社エンラプト
- グローバルナレッジネットワーク株式会社
- Innova Solutions, Inc.
- 株式会社ワコム

■アカデミック・スポンサー 一覧 (23教育機関、順不同、2014年6月現在)

- 産業技術大学院大学
- 慶應義塾大学 大学院システムデザイン・マネジメント研究科
- サイバー大学
- 芝浦工業大学
- 金沢工業大学
- 九州大学大学院芸術工学府デザインストラテジー専攻
- 広島修道大学経済科学部
- 北海道大学 大学院情報科学研究科
- 山口大学大学院技術経営研究科
- 筑波大学大学院システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻
- 早稲田大学 ビジネススクール
- 早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部 情報理工学科
- 公立大学法人 広島市立大学 情報科学部

- 国立高等専門学校機構 仙台高等専門学校
- 北海道大学 サステナビリティ学教育研究センター
- 大阪大学 大学院工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻
- 愛媛大学工学部および大学院理工学研究科工学系
- 国立高等専門学校機構 八戸工業高等専門学校
- 学校法人中部大学 経営情報学部
- 京都光華女子大学
- 鹿児島大学産学連携推進センター
- 中央大学 文学部社会情報学専攻
- 千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科

Editor's Note / 編集後記

執筆者の皆さまへ。お忙しいところ、ご協力いただきありがとうございました。

- 今号のトップでは、本年5月に開催した「グローバル・リーダー香港研修コース」の結果を、事務局長の田坂からご報告しました。「グローバル・リーダー研修」は今回で6回目を迎え、内容はますます洗練されています。
- 本年5月末から6月半ばにかけて、札幌から福岡まで全国8カ所で行った「PMBOK®ガイド 第5版 日本語版ご紹介セミナー」の様子について、事務局長の田坂からご報告しました。講師を務めたPMI日本支部の中嶋秀隆理事（第5版日本語版翻訳監修の中心的メンバー）による熱のこもった講演で、大変好評をいただきました。
- 毎回好評をいただいている月例セミナーからは、6月度の「PMのためのプレゼンテーションの極意」。日本大学芸術学部教授、パフォーマンス学の第一人者である佐藤綾子氏による「明日からすぐに使えるプレゼン技法」の指南は目からウロコでした。セミナー委員会 鬼束孝則氏によるレポートです。
- 東日本大震災の後に立ちあがった「災害復興支援プログラム」。そこで得られた教訓を社会課題解決のために活かすことを目的に創設された「ソーシャル・プロジェクトマネジメント（ソーシャルPM）研究会」。今回は研究会代表の高橋正憲（PMI日本支部理事）氏から、ソーシャルPMの基本的な考え方と研究会組織の概要の解説です。次回以降は各WGの具体的な活動・成果を御紹介します。

ニューズレター編集担当から読者の皆様へお願い

皆さまからの書評、論評、トピックス、セミナー受講レポート、プロジェクト体験記、PMP認定試験受験体験記などを募集しています。PMI日本支部事務局宛てにお送りください。

PMI日本支部最大のイベントである「PMI日本フォーラム2014」の開催まで残すところあと2週間、事務局の準備も佳境を迎えています。今年は大阪梅田のサテライト会場へのライブ配信という新しい試みにも取り組み、皆さまと共に実りあるものにすべく全力を傾注しています。

よろしくお願い致します。

PMI日本支部ニューズレター Vol.59 2014年6月発行

編集・発行：PMI日本支部 事務局
 〒103-0008 東京都中央区日本橋中洲3-15 センタービル3階
 TEL：03-5847-7301 FAX：03-3664-9833
 E-mail：info@pmi-japan.org
 ホームページ：https://www.pmi-japan.org/

(非売品)